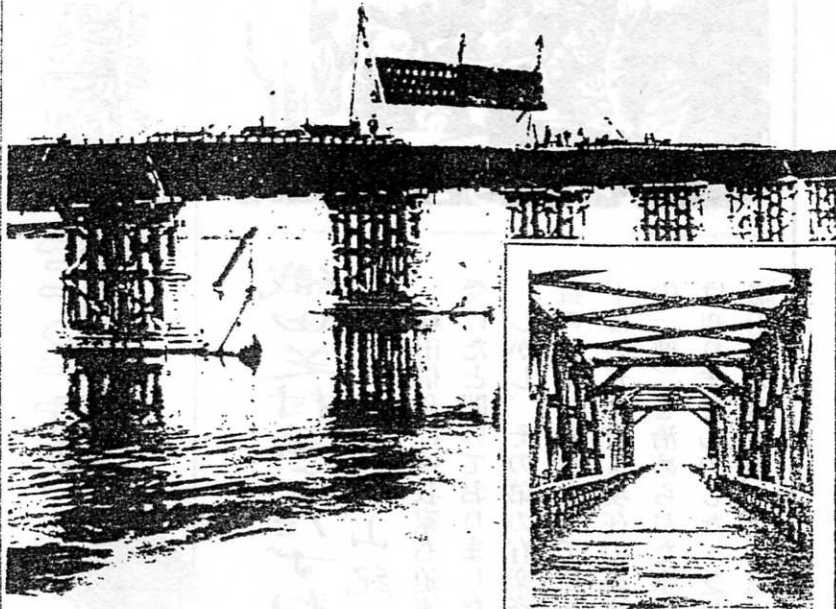


摂津なつかし写真館



郷土摂津

いにしえ通信

第 1 2 号

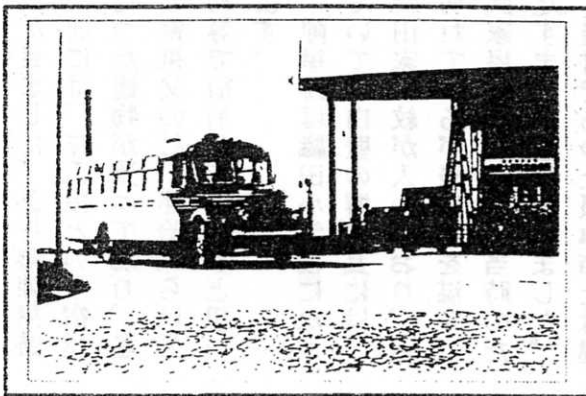
平成十一年四月一日

発行

摂津市三島一丁目一番一号

摂津市教育委員会

生涯学習部 生涯学習課



木造の鳥飼大橋

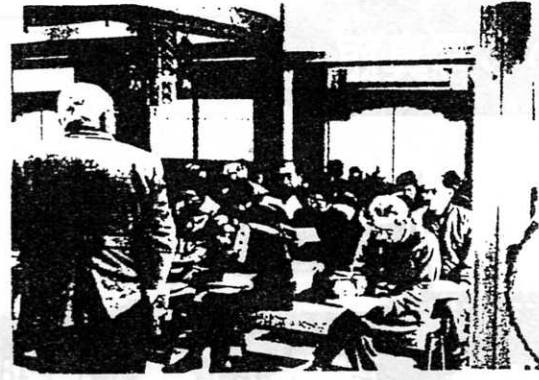
鳥飼大橋料金徴収所

成しました。木造の旧橋はその後も使用されましたが、三十五年に撤去されました。新しい鳥飼大橋は三十一年に日本道路公団に引き継がれ、有料道路橋第一号となりました。三十九年に償却を終わって大阪府に移管され、無料開放になりました。

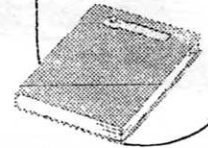


鳥飼大橋は、昭和十八年に開通するはずでしたが、戦況悪化のために未完成のまま終戦を迎え、二十二年にようやく木造の小さな橋が完成しました。道路が未整備のため、それほど重要性は持ち得ませんでした。二十七年に新橋の工事が開始され、二十九年に完

慶田寺にて



投稿欄 『私にも一言』



織田芝村藩をたずねて 村山紀子

織田信長には我家も迫害を受けたと聞いておりました。しかし、その弟の有楽斎長益の家系が領主として摂州嶋下郡の五カ村（現在の摂津市の一部）を治められた事を私は知りませんでした。芝村藩織田氏の事を知りたく思い、

三月七日（日）、雨降る中、午前九時マイクロバスで旧芝村藩（桜井市）に向かって出発しました。芝村藩の菩提寺（慶田寺）そして芝村藩陣屋跡、三輪神社とめぐり、奈良県文化財保護指導委員堀井孝昭先生の絶妙な言葉に参加者二十五名は熱心に耳を傾けていました。織田氏を通じて、摂津市と桜井市との以外なつながりに驚きの一日でした。

今回のツアーに参加させていただきました。芝村藩陣屋跡門前には、味舌屋という宿屋だった建物が残っており、私の曾祖父の村山伴治郎らは公務等で宿泊していた事と思います。

陣屋跡は織田小学校になっていて、白壁の塀の瓦には、織田家の紋が入っており、途切れているが濠に水を湛え、武家屋敷跡も有り、当時のたずまいが想像出来ました。農村であった摂津市とは違い、領主の陣屋の有った町の桜井市だと思いました。

淀川の春

長野苗子



淀川に春がやってきましたわんどは茶色のフリルのようです。黄色のタンポポは太陽の光をいっぱいを受けています。ロウバイの木が高くそびえ、西洋ススキの美しい庭があります。小犬が石臼につながれていて、小猫は古い脱穀機の上でねそべっています。

淀川の水面はキラキラとガラスと云うかセロハンのように光り輝いています。

平成九年初夏、大阪府立中之島図書館の「大阪・淀川展」の冊子を開いています。

慶応四年五月の大洪水、明治十八年（一八八五年）、未曾有の大洪水、大阪府が発行した公式記録『洪水誌』によれば、「被災町村一、六五五浸水戸数七五、七七八、被害家屋一七、三四〇、死者・行方不明者一三七名等々」となっている。続いて明治二十二年にも淀川は氾濫し、右岸（島本町・高槻・茨木・摂津・吹田各市）の住民・田畑は大きな被害を受けた。

このように淀川の歴史は、また洪水の歴史でもありました。

淀川の今はテニスコートがあり、ゴルフ場もあります。水面では早くも水上バイクがエンジンのエネルギーを発散しています。

淀川の春は大阪の人々の春なのです。

郷土史コーナー

味舌と太閤検地

封建社会では農業生産がその経済的な地盤となりますので、支配者は何をにおいても土地制度を確立しなければなりません。すでに荘園制の複雑な領有関係を脱却して、土地人民に対する完全支配が進行していくのにつれて、戦国諸侯は自分の手で自分の標準によつて検地を行い、またその検地によつて完全支配をおし進めて行きました。

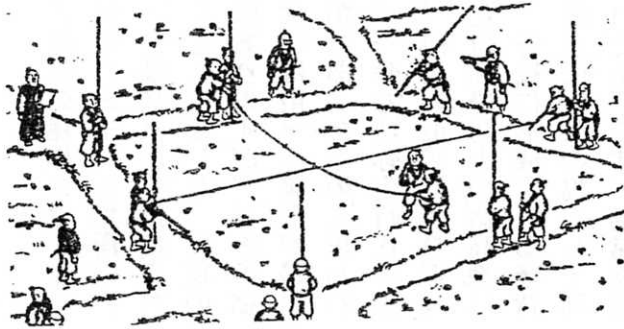
豊臣秀吉は天正十年（一五八二年）本能寺の変の翌月には、山城国の「指出（さしだし）」（土地台帳の基礎）を提出させています。摂津国では、天正十一年に大坂城に入つてまもなく検地を始めたことと推定され、全国の平定が完了した天正十九年にも検地を実施していますが、その詳細は

わかりません。秀吉は各地の平定を進めるにしたがつて検地を実施し、全国に及ぼしていききました。これにともなつて検地の方法も整備されました。文禄三年（一五九四年）全国的に統一した基準をもつて徹底した検地を実施しました。

検地にあつては、検地奉行を現地に派遣します。まず、田畑・屋敷などの土地を一筆ごとに測量して、それぞれの面積を確定し、さらに一筆ごとに地味を調べて上・中・下などの品等づけをします。一反につき上田は米一石五斗、中田は一石三斗、下田は一石一斗、上畑は一石二斗、中畑は一石、下畑は八斗の収穫があるものとみなします。畑の生産物はすべて米に換算していきます。この公定の収穫率を石盛（こくもり）といいます。一筆ごとの面積に応じた石盛

を掛けると、一筆ごとに米の収穫高があるはずだという石高による表現ができます。

太閤検地では、従来まちまちであつた面積の単位を六尺三寸を一步に統一し、従来の三六〇歩（一反）を三〇〇歩（一反）に改め、新しく三十歩を一畝の単位を設けました。※秀吉の場合、通常二公一民貢として村から納めます。村高そのものが年貢高ではありません。



検地の風景

『日本の歴史』小学館より

味舌下村の太閤検地帳は、表紙に「摂州大田郡味舌之内下村御検地帳」

「文禄三年」 「拾月十八日」と記し、庄屋村の太閤検地帳は、「摂州大田郡内味舌村ノ庄屋村御検地帳」 「文禄三年」 「九月廿六日」と記しています。両村ともに検地奉行は、八嶋久兵衛でした。

文禄三年、摂津国の検地奉行の片桐且元、浅野長政、八嶋久兵衛などはかなり手なれた検地功者として名が売れていました。

味舌下村は村高九五七石六斗三升八合（面積八六町一畝五歩）、庄屋村は村高二二〇石二斗九升七合（七町三畝二五歩）と定められました。両村とも低湿地で、水害が多く、排水の悪い水損村であることを示しています。

「近世農民生活史」

「摂津市史」より 担当（茗荷）

考
古
雑
話

第 1 2 回

摂津市と水田の考古学

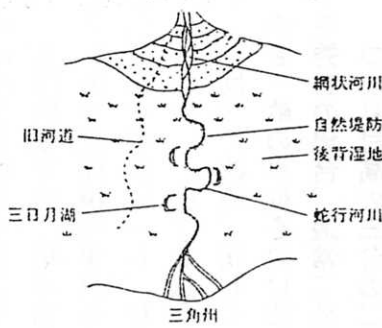
はじめに

日本文化は稲作の文化だとよくいわれます。確かに工業社会として成立・発展する以前の社会においてコメは流通経済の中心であったと言っても過言ではありません。またさまざまな生活の行事にもコメは関係してきます。正月にはコメの餅を雑煮にいられて祝うし、めでたい折りには赤飯を炊きます。

日本文化は稲作の文化だとよくいわれます。確かに工業社会として成立・発展する以前の社会においてコメは流通経済の中心であったと言っても過言ではありません。またさまざまな生活の行事にもコメは関係してきます。正月にはコメの餅を雑煮にいられて祝うし、めでたい折りには赤飯を炊きます。

水田と立地

弥生時代の稲作のはじまりは湿潤性に恵まれた場所であったことは従来より指摘されているところでした。陸稲の問題はありますが、日本の稲作経営には用水の確保が最重要課題であったものと思われる。一般的に弥生時代の集落は、河川の氾濫により形成された自然堤防上の微高地に営み、背後に形成される後背湿地が水田経営の場として利用されたようです。通常検出される西日本の水田遺跡の多



海にいたる川の変化

くは洪水による流土・流砂により埋没したものです。当時の人々は洪水のリスクを負いながらも洪水により微妙に変化する地形に、水田を経営していたようです。

摂津市は、淀川をはじめ大小の河川が流れ用水の確保という点では恵まれていたと言えます。今後本市でも古代までさかのぼる水田跡が発見される可能性は十分にありま

【1】 地震考古学

○遺跡に見られる地震の痕跡を明らかにし、地震の発生年代を考えようとする研究。○考古学との接点は古墳の地震による変形、地震による陸域の水没など多岐にわたります。○過去の証し将来きる分野として期待されています。



○最近兵庫県に所在する西求女塚古墳の発掘調査で江戸時代の地震により倒壊した石室が検出され話題になりました。

担当 (伊部)